

この包括ケアの時代に応える自分でありたい

菊入 恵一*1,2

*1 医療法人崇徳会 田宮病院

*2 新潟県作業療法士会 副会長

2019年、新潟で初の開催となった第1回新潟県リハビリテーション専門職学術大会は、600名を超える参加者が集まり大盛況に終えた。この大会長基調講演においてPT士会佐藤会長よりリハビリテーション専門職の未来についてのお話があった。それは、近い未来にリハビリ専門職の供給が需要を上回るということ。そして、専門職としての質が問われる時代になっていくとのことであった。これは、専門士の免許さえ持っていれば働けるという時代から質の低い専門士は淘汰されていく未来を意味している。私たちは、この時代をどのように生き残っていくのか、試される未来が待っている。その他にも、国はPT・ST・OTを一つの職種として見ていること、さらに、この3職種を一つに統合したらどうかという話も出ていたとあった。さて、この危機的な状況を聞いて皆さんはどのように感じるであろうか。私としては「こんなことがあっていいのか。」「他の職種と我々は違うじゃないか。」と叫ばずにはいられない。それはPT・STとは異なる教育を受け、OTとして就職し、職務を遂行している訳であって、この事はまるで自分が消えてしまうように思えるからである。しかし、この叫びは“ただの保身”でしかないことに気が付く。「利用者にとってはどうなのか。」「社会にとってどうなのか。」を考えるとどうなであろうか。利用者や社会にとってもトータル的に見られるリハ職種が求められるのだとしたら、変わらなければならないのは自分たちになのではないだろうか。そして、実際に現場の臨床が必要として同じような職務を果たしているのならば、一つになるのはごく自然なことで、社会にとっては無理のない良い結果が待っているのかもしれない。この話を、

「進化」と捉えるのか、「滅亡」ととらえるのか、皆さんは如何だろうか。

ホモサピエンス全史(ユヴァル・ノア・ハラリ著)に大変興味深い内容が載っている。人が地球上最強生物として君臨できたのは、単に脳が大きかった訳ではないという。人は他の生物にはない唯一の能力を持っていたからだと述べている。それは、『虚構(未来)を共有でき、戦略を立て連携できる力』をもっていたからだというのだ。今回の大会テーマである「連携」と「連動」の末、生きながらえたのが”人”という生き物である。今回の学術大会になぞらえると、PT・ST・OTという異なる種族が未来を共有し、それぞれの専門性を高め合い、包括ケアの時代に向かって連動しあう仲間であることの確認ができたような気がするのである。そして、他の職種の専門性の違いも同時に感じた。OTが作業をもって活動と参加を促進するという独自性を持つ種族であることを再認識できたことも良かった。この大会を通じて感じた事と同じように、今後「連携」「連動」が進めば進む程に、必ずOTとして立ち返る瞬間がある。私たちはOTだからできることを伝えていかなければいけないこと。それを学術的に叫ばなければならないことを強く思う。

私が思う未来を述べたい。地域包括ケアシステムは高齢者を中心に進められているが、これからは精神障害にも対応するものとなり、身体・知的障害・難病を持った人にも対応するものになる。この地域包括ケアシステムは、障害があってもなくても安心・安全で健康で幸福な社会とする”地域共生社会”へとつながっていつている。そのため、私たちの対象は様々なライフサイクルに合わせたものへと変化

し、その実践は今以上に複雑化していくことになるのであろうと想像する。自分自身もだが、高齢・精神・身体・知的・難病と分野が変わるとチンプンカンプンでよいのだろうか？この時代に対応するならば、統合したリハ職よりも前に、OTとしての統合を目指していく必要があるのではないかと思う。私の戦略としてはこうである。一つはOTの共通となる理論を持つこと（私的に OBP2.0 かな）。次に MTDLP をフレームに、他分野の多くのリーズニングを聞くことと語ること。そして、協働する仲間

（SIG・士会活動）と共に進化」するのである。

さて、皆さまと私が思う虚構（未来）は共有できただろうか。これからの時代に応える自分でありたい。目の前の方の願いを叶える OT でありたいと切に思う。まずは OT 同士の連動を楽しみながらやっていきたい。

最後に、ここまで読んでいただいた方と、この機会を与えて頂いた学術誌編集委員の皆様、学術誌へ投稿を頂いた皆様に感謝し巻頭言とする。